夜野せせり／著
藤原ゆん／イラスト

PHP
ジュニアノベル

植村ちひろ

中一。まじめでクラスでは目立たないタイプの女の子。本人は自覚がないけれど、テストでは学年一位になるほど勉強が得意。押しに弱くて流されやすいところと、ちょっとそそっかしいことが悩み。部活も習い事もしてないため、ヒマだと思われがちだけど、実は……。

雨宮涼介

中一。学内で「最強不良」とうわさされている男の子。ちひろと同じクラス。不良なのに学校にはちゃんと来ている。背が高くてかっこいいけど、不良のうわさがあるため、自称・舎弟の一平を除いてだれも近づかない。ちひろにいきなり「つきあってほしい」と言ってきたその理由とは……？

二階堂誠

中二。女子に超人気な生徒会長。成績優秀で、さらっさらの黒髪イケメン。知的でクールな顔立ち。ちひろのことを気に入っている。

真凛

街で雨宮くんと親し気に歩いていたなぞのJK。めちゃくちゃ美人でモデル体型。大人っぽくて、ちひろとは正反対のタイプ。雨宮くんの彼女……かも？

遠藤都

中一。ちひろと同じクラス。ちひろとは同小でずっと仲良し。耳下のツインテールとまんまるい瞳がチャームポイント。ゴシップが大好きで、芸能人やクラスメイトのうわさからご近所さんのうわさまで、なんでも詳しい。

辻岡一平

中一。ちひろたちの隣のクラス。雨宮くんのことを「アニキ」と呼ぶ、自称・舎弟。やんちゃでいたずらっ子な一面も。

もくじ

1 雨宮くんに、告白された!? 004
2 雨宮くんに、呼び出された! 016
3 雨宮くんと、おうちで勉強 026
4 雨宮くんの、かわいい「彼女」 038
5 雨宮くんと、あやしい(?)男 051
6 雨宮くんと、うわさの真相 061
7 雨宮くんと、わたしのお守り 069
8 雨宮くんと、うわさになった!? 078
9 雨宮くんと、ふたりで映画! 090
10 雨宮くんと、なぞの美女 102
11 雨宮くんへの、わたしの「気持ち」 114
12 雨宮くんと、会えない日々 124
13 雨宮くんがくれた「言葉」 136
14 雨宮くんと、生徒会長 147
15 雨宮くんを、守るためなら。 157
16 雨宮くんと、みんなで乾杯! 168
17 雨宮くんと、新たな闘争!? 178

1　雨宮くんに、告白された!?

きらきら、きらきら、水しぶきが舞っている。
花壇のコスモスも、冷たい水をあびて、いきいきと揺れている。
秋の空はどこまでも青くって、気温はまだ高いけど、空気はからりと乾いていて過ごしやすい。
「はあ……」
こんなにいい天気なのに、わたしの気分は最悪。ため息しか出ない。
放課後、教室を出ようとしたら、クラスの目立つグループの女子たちに、花壇の水やりを頼まれてしまったんだ。
近くの蛇口から引いたホースで、まんべんなく水をかける。
べつに、お花の世話が嫌いなわけじゃない。わたしは部活も習い事もしてないから、時間もある。
でもね！　だからって、わたしにばっかりいろいろ押しつけるのは、ちがうと思う!!

なのに。
「ね～お願い！　代わって～！　今度埋め合わせするからっ！」
いつだって、にっこり笑顔で、そんなふうに頼まれるの。
校庭の掃除とか、教室の掲示物の貼り替えとか、そういう、係の面倒なお仕事。
ちなみに、「埋め合わせ」してもらったことは、まだ一度もない。
わたし、植村ちひろは、まじめさと、ちょっと成績がいいことだけが取り柄の中学一年生。
教室ではまーったく目立たず、地味～なポジションにいます。
おとなしいし、押しに弱くて流されやすいから、いろいろ押しつけやすいんだろうな……。
実は、部活も習い事もしていないのには、ワケがあるのに。
それをはっきり言えない自分も悪いんだけどさ……。
ホースをゆらゆら動かして、花壇の奥のほうまで水をかける。
「ちょっと、いい？」
ふいに、背後で声がした。男の子の、低い声。

ん？　わたしに声をかけてるの？
「植村さん」
名前を呼ばれた！
ヤバッ。ぼーっとしてた。あわてて振り返ると。
「わあああああっ」
びっくりして心臓止まるかと思った！
だって、そこにいたのは、同じクラスの雨宮涼介くん。
むちゃくちゃヤバい「最強不良」ってうわさの、目つきの鋭い男の子。
さらっとした髪は茶色がかっていて、日の光が当たると、ところどころ金色に光って見える。
顔立ちは整っていて、きれいなんだけど、にこりともしないから、氷みたいに冷たい感じ。しかも、ほおにはいくつもかすり傷がある。
制服のシャツはスラックスにインせず着崩していて、ネクタイもきちんとしめてない。
袖をまくり上げた左腕には、包帯が巻かれている。他校の怖い人たちとケンカしてケガしたって、もっぱらのうわさ。

なにより背が高くて！　１４８センチのわたしは、見下ろされるだけで、足がすくみそう。

「植村さん」

「はいっ！　なななな、なんでしょうっ!?」

はっ！　わたし、まさかお金取られる？　いわゆるカツアゲってやつですか？

「今日はお財布忘れてきちゃって、い、一円も持ってませんっ……」

怖くて声がふるえてしまう。

「はあ？」

雨宮くんはぎゅっと眉根を寄せた。ひえーっ！　心臓が縮みあがるよ！

思わず、手にしていたホースを握りしめた。

すると。

ホースの口がつぶれて、勢いを増した水が、雨宮くんの腕に直撃してしまった!!

しかも、包帯が巻かれたほうの腕に!!

「わあああっ！　ごめんなさいっ!!」

叫んで、ホースを投げ出した。

包帯がずぶ濡れになっちゃったよ!!

「ど、ど、どうしようっ」

あわてふためくわたし。

「とりあえず、水、止めれば?」

冷静に言われて、こくこくっとうなずいた。水を止めよう。

蛇口をひねって水を止め、ホースを片づける。

くるっと振り返ると、まだ雨宮くんはもとの場所にたたずんでいる。

ひどい目にあわされるかもしれない。だって、絶対怒ってるよね?

逃げるなら今のうちだ。

でも、わたしのせいで雨宮くんの包帯が濡れてしまった。ケガの状態はよくわからないけど、もし、そのままにして悪化することがあったら……!

ごくりと、つばを飲みこむ。

覚悟を決めよう。

「あ、あの」

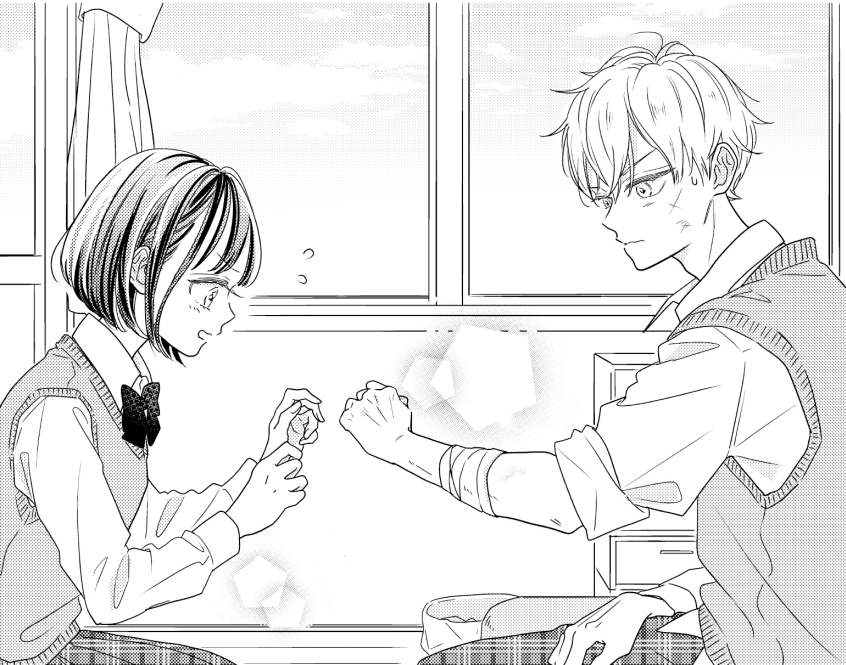
おずおずと、雨宮くんに近づいた。

「ん？」
雨宮くんがわたしを見下ろす。い、威圧感っ!!
がんばれ、ちひろ。ひるんじゃダメ！
「保健室、行きましょう。包帯、替えなくちゃ」
「あぁ？　いーよこんなの、べつに」
雨宮くんは自分の腕を上げると、濡れた包帯をどうでもよさそうに見やった。
「べつによくないです！　い、いっしょに保健室に行きましょう!!」
叫ぶように言い張ると、雨宮くんは、
「まぁ……、そんなに言うなら」
と、しぶしぶうなずいた。

校舎に戻り、保健室へ。
「失礼しまーす。って、あれ？　だれもいない」
養護の先生は不在だった。ドアの鍵は閉められてなかったから、まだ帰ったわけじゃないと思う。

「めんどくせ。おれ、やっぱ帰るわ」
雨宮くんが小さくため息をついた。
包帯ずぶ濡れのまま帰るの？　絶対家で巻き直したりしなさそう。それはよくない！
わたしはふるふると首を横に振った。
「座って待ちましょう」
パイプ椅子を指さすと、雨宮くんは「しょーがねーな」と腰を下ろした。
机の上には、先生がいつも使っている救急箱が置いてある。
包帯を替えることぐらい、わたしにもできると思うんだけど、学校の備品を勝手にさわっちゃ、ダメだよね。
でも。
「とりあえず、包帯をはずします」
「いーよべつに。自分でできるし」
「やらせてください!!」
だって、わたしのせいで濡れちゃったんだもん。
「……。じゃあ」

すっと、雨宮くんは左腕をわたしの前に差し出した。
「し、失礼します」
他校の名だたる不良たちとケンカしているという、雨宮くんの腕。
わたしの腕より太くて筋張ってるけど、筋肉モリモリって感じじゃないし、きれいだし、この腕で人をたくさん殴ってきたなんて信じられない。
「何ジロジロ見てんだよ」
ひえっ！
「すみませんっ！」
するすると、包帯をはずした。男の子の腕にさわるのなんて初めてだから、どぎまぎしてしまう。



包帯に覆われていた、傷テープも水で濡れている。
「これも替えたほうがいいのかな……？」
「あー。貼ったの一週間ぐらい前だから、替えてもいいんじゃね」
「じゃ、じゃあ」
そっと触れると、雨宮くんの腕がぴくっとふるえた。
「い、痛いですかっ？」
「痛くはねーけど」
ぼそっと、つぶやくような雨宮くんの声。
おそるおそる彼のほうを見る。雨宮くんのほおが、ほんのり赤く染まっている……。
「……」
なんだか妙に恥ずかしくなってしまって、わたしも、何も言えなくなった。
「植村さん」
沈黙をやぶったのは、雨宮くん。
「は、はい」
「あんた、めちゃくちゃ頭いいんだってな」

え？　急に、なんの話？
「いえ、そんなことないです。わたしなんてぜんぜん……」
「でも、前回のテストで、学年一位だったんだろ？」
「あれは、たまたまです。覚えていたところが、たくさんテストに出ただけで」
一位なんてまぐれです。
がり勉って陰口言われるのが嫌で、テストの結果はひみつにしていたのに、なんで雨宮くんが知ってるんだろう。
「実はおれ、植村さんに」
雨宮くんが急に姿勢をただして、わたしの目を見た。
な、な、何!?
思わず身構えると、雨宮くんは思い切ったように、
「つきあってほしい」
そう、告げた。
「え。……えええっ」
つ、つ、つきあって、ほしい!?

目玉も心臓もぜんぶ飛び出しそうなぐらいびっくりしたわたしは、思わず、傷テープを一気にはがしてしまった！

「いてててててっ！」

「ご、ごめんなさいっ!!」

どういうつもり？

はっ、まさか罰ゲーム？　いやいや、雨宮くんって「人に罰ゲームさせる側」の人で、「やらされる側」の人じゃないよね？

あ、でも、このケガの原因になったケンカで負けて仕方なく、とか。

ありえる。「おまえの学校でいちばん地味な奴にコクってこいよ～」って言われたとか。

うう、悲しくなってきた……。

うつむいていると、がらりと保健室のドアが開いた！

「あら、ケガ？」

養護の先生が戻ってきた。

「せ、先生っ！」

ぱっと、雨宮くんの腕から手を離す。

「包帯が濡れちゃって……！　替えてほしくて来ました。あとの処置、よろしくお願いしますっ!!」

わたしは先生に頭を下げて、おおあわてで保健室を出た。

そのまま、駆け足で校舎を飛び出す。

つ、つ、つきあう!?　冗談じゃないよ！

がり勉キャラで地味子のわたしと、不良の雨宮くん。クラスがいっしょということ以外、まったく接点ないし。

雨宮くんがあんなこと言うなんて、変だ。

これには、絶対にウラがある!!

2　雨宮くんに、呼び出された！

次の日。

どきどきびくびくしながら登校すると、雨宮くんはもう教室にいた。

不良のわりに毎日遅刻せずにちゃんと登校してるんだよね。

ひょっとして皆勤賞なんじゃ？　ってぐらい、きちんと来てる。

まあ、授業が始まったとたん、寝ちゃうんだけど……。

雨宮くんは教室のいちばんうしろの角っこで、かべに背中を預けながら、けだるげに物思いにふけっている。

「ちひろっ！　おはようっ」

声をかけられて、びくっと肩がふるえた。

「あ……。み、都。おはよう……」

いつもいっしょにいる、小学校から仲良しの、遠藤都。耳下でふたつにくくった髪と、まんまるい瞳がチャームポイントの女の子。

ゴシップが大好きで、芸能人から、クラスメイトや近所のおじさんおばさんの話にいたるまで、いろんなうわさ話にくわしい。
「雨宮涼介がどうかしたの？」
「え？　べ、べつに何もっ」
こっそり見てたの、気づかれたんだ。あわててごまかす。
ちょうどそのタイミングで、教室に小柄な男子が駆けこんできた。
そして、まっすぐに、雨宮くんのそばへ。
「アニキ！　おはようございまっす！　今日もいい天気っすね！」
やんちゃないだずらっ子って雰囲気の男の子。制服を、雨宮くんみたいに着崩している。ふんわりした天然パーマの、やわらかそうな髪。前髪をピンで留めている。
「四組の辻岡一平だー。知ってる？　あの人、雨宮の舎弟らしいよ？」
「舎弟……」
だから同学年なのにアニキ呼びなんだ。
「ぶんぶんしっぽ振って、犬みたいだよね」
都はくすくす笑った。うん、ほんとは存在しないはずのしっぽが、なぜか見える。

「雨宮といえばさー。ヤバいうわさ聞いちゃった」
都は声をひそめた。
「雨宮が、このへんの中学とか高校の、不良グループとの闘争に明け暮れてるって話は有名じゃん？」
有名なのかはわからないけど、とりあえずあいまいにうなずいた。
「雨宮、ダントツに強くって、他校の男子、たくさん従えてるらしいよ。雨宮がコワモテの男子にかしずかれてるの、見たって人、たくさんいるんだよ」
「へ、へえ……」
脳内に、不良男子たちをぞろぞろ従えた雨宮くんの姿が思い浮かんだ。
こういう「不良軍団のトップ」って、なんていうんだっけ。親分？　総長？
都はさらに続ける。
「で。雨宮、とうとうヤバい大人に目をつけられたんだって。仲間になるのかなあ」
「え？　……は？」
ヤバい大人とは。仲間とは。
「ここだけの話ね？　雨宮、ほっぺにでっかい傷あとのある、サングラスかけたいかついお

じさんに肩組まれて歩いてたんだってー。そのおじさん、刑務所から出てきたばっかりってうわさだよ」

ほおに切り傷のあるおじさん……。刑務所……。待って、脳が混乱してる。

「その、ヤバい大人と仲間になって、どうするの？」

「決まってんじゃん。ヤバい仕事させられるんだよ」

都はにやりと笑った。

始業のチャイムが鳴って、都は自分の席へ戻っていった。

頭がくらくらする。そんなに華麗な経歴？　伝説？　を持った、不良の雨宮くんが。

わたしに「つきあって」だなんて。やっぱりありえない!!

とりあえず、昨日のことは忘れて、普通に過ごそう。

そう思っていたんだけど……。

＊＊＊

その日の、昼休み。

給食を終えて、はみがきをして、自分の席に戻ると。
「ちょっと、いい？」
雨宮くんが！　わたしを！　待っていたの!!
「な、なんでしょうっ」
「昨日の続き。話、途中だったから」
ぼそっと、ぶっきらぼうに言うと、雨宮くんはわたしから目をそらした。耳たぶが真っ赤に染まっている。
――つきあってほしい。
昨日の言葉が一瞬で耳の奥によみがえって、顔が熱くなる。
「と、と、とりあえず外にっ」
わたしはあわてて、雨宮くんといっしょに教室の外に出た。クラスのみんな（特に都）に見られたら、おかしなうわさになっちゃう！
校舎四階の廊下のつきあたりに、屋上へ続く階段がある。だけど屋上は立ち入り禁止だから、この階段に近づく人はいない。ここまで来たら、きっともうだいじょうぶ。
「は、話って」

息を整えて、雨宮くんに向き合った。
雨宮くんはほおをほんのり赤く染めている。その様子を見ていたら、なんだかわたしまでどきどきしてきた。
昨日の告白には、絶対にウラがあるに決まってる。でも、もしも、本気だったら……？
本当に、雨宮くんが、わたしと「つきあいたい」って思ってくれてるとしたら……？
「植村さん」
「は、はいっ」
どきどきするようっ……!!
わたし、自慢じゃないけど、だれかにコクられたことなんて、人生で一度もない。
「つきあってほしいんだ」
雨宮くんはわたしの目を見た。
「あ……」
わたしはうつむいた。
雨宮くんの声も、目も、まっすぐだった。とてもじゃないけど、罰ゲームで言わされてるようには見えない。